

レファレンス・コーナー -- ネパールの入門・概説書 (ブックシェルフ)

著者	東川 繁
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	135
ページ	49-49
発行年	2006-12
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005356

レファレンス コーナー ネパールの入門・ 概説書

東川 繁

ネパールは人口約二六〇〇万人、面積約一五万平方キロメートルで、国土はヒマラヤ山脈に沿った東西に細長い形状をしている。首都はカトマンズ、主要言語はネパール語。イラクと同程度の人口規模とバングラデシュと同程度の国土面積を持つ同国は、決して小国ではない。しかし、隣接する二つの大国、中国とインドに挟まれるといかにも目立たない。中国との国境に世界最高峰エベレスト（ネパール名サガルマータ）があり、国内にも八〇〇〇メートルを超える山々がそびえる。それもあってか、わが国での同国に関する報道は登山に関するものが多かった。そのネパールが数年前、世界のメディアに大きく取り上げられたことがある。

る。二〇〇一年に起きた、国王をはじめとする王族の殺害事件である。

世界に大きな衝撃を与えたこの事件には不可解な点が多く、国王の弟の陰謀ではないかという疑惑が持たれた。それ以後の同国は政治的混乱が続いている。この事件によって、同国のマオイスト（ネパール共産党毛沢東主義派）という政治勢力の存在を知った人も多いのではなからうか。

ネパールに関する日本語の文献、特に単行書は本来的に出版点数が少ないが、年に数点は着実に刊行されている。分野としては自然環境関係、文化人類学・民族学関係、社会学関係が多いのが特色である。また、開発協力関係のものもよく出されている。ここではそのなかから入門書、概説書といえるものを何点か取り上げて紹介してみよう。

まず、エリアハンドブック的なものとして石井博編『もっと知りたいネパール』(弘文堂 一九八六年初版 一九九二年補訂)がある。歴史、政治、経済等一三分野にわたって概説する。一分野当たりの記述量は少ない。また内容的に少し古くなってきているので、新しい資料での補充が必要となろう。石井博編『ネパール』(河出書房新社 一九九七年)は、「暮らしがわかるアジア読本」シリーズの一冊。社会、生活、文化面を中心に描く。「ヒマラヤの国の課題」、「家族とカースト」、「カトマンズ最新音楽事情」など、約四〇の項目がある。これに類似したものに、(社)日本

ネパール協会編『ネパールを知るための六〇章』(明石書店 二〇〇〇年)がある。現代ネパール社会の諸相を大きく七部門に分けて概説する。「グルカ兵のその後」、「女性の相続権」、「ネパールの医療事情」など、視点は多様である。

歴史関係では佐伯和彦『ネパール全史』(明石書店 二〇〇三年)がある。七七〇ページ近い大著。これまでインドとの関係で書かれることの多かった同国の歴史であるが、本書はネパール全域の本格的な通史である。古代から現代までを概説するが、古代、中世は特に充実している。

政治関係では小倉清子『王国を揺るがした六〇日—一五〇人の証言—ネパール民主化闘争』(亜紀書房 一九九九年)が、一九九〇年の民主化運動をドキュメンタリー風に描いている。著者は一九九三年よりネパールに在住するジャーナリストで、同国の政治動向に関する取材が続けている。なお、本書の英語版 *Kathmandu Spring: The People's Movement of 1990* が二〇〇一年に現地で刊行されている。マンジュシュリ・タバ『ネパールの政治と人権—王政と民主主義のはざままで—』(明石書店 二〇〇六年)は、ネパール人ルポライターによる英語図書翻訳。原著 *Fogel Kathmandu: An Elegy for Democracy* は二〇〇五年にインドで刊行されている。二〇〇一年の王族殺害事件以降の政治的混乱を描く。本書では二〇〇五年二月の軍事

クーデターについての著者による追記が付されている。

社会関係では石井博編著『流動するネパール—地域社会の変容—』(東京大学出版会 二〇〇五年)が新しい。第一部はネパールの政治、経済、社会、文化の近年の変化について概説する。第二部はそれを背景に都市部、都市近郊、農山村等の地域社会の変化を分析する。記述はやや専門的である。

『アジア動向年報』(アジア経済研究所 各年版)にはネパールの項目がある。前年一年間の政治および経済の主要動向をまとめている。重要日誌、国家機構図、主要統計等の参考資料も付されている。

入門・概説書の範疇には入らないものの、ネパール社会の実像を興味深く描いた文献を併せて紹介しておく。矢木澤高明『ネパールに生きる—揺れる王国の人びと—』(新泉社 二〇〇四年)は、児童労働、マオイスト、元グルカ兵などを取材した記録。著者は一〇年以上ネパールの社会問題を追いつけているフリーカメラマン。定松栄一『開発援助が社会運動か—現場から問い直すNGOの存在意義—』(コモンズ 二〇〇二年)は、著者が現地で五年間、NGOの駐在員として活動した際の記録。政治との関わり合いなど、開発協力の根幹に関わる問題点を指摘している。

(ひがしかわ しげる/アジア経済研究所図書館)